別役実の世界

別役実の世界

別役実の世界

初版発行　昭和五十七年六月十五日

発行者　御喜家康正

発行所　㈱新評社

〒104　東京都中央区銀座五―六―十二みゆきビル

電話　東京（五七三）四六一一

振替　東京〇―五六八八〇

印刷　大興印刷株式会社

製本　有限会社細沼印刷製本所

0091―04016―3337

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

©1982

別役実の世界——目次

PART1——別役実と私

8 別役実との青春……小笠原昌夫

11 処女作以前……鈴木忠志

14 一介の学生、一介の精神……月村敏行

19 書記局員〝役さん〟……佐々木伸良

23 もうひとつの世界……喜多哲正

PART2——対談・インタビュー

28 別役実の世界……聞き手 岩波剛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

54 別役戯曲の魅力と演出……藤原新平
末木利文

PART3——別役実論①

72 マッチ売りの少女と「天皇」……大笹吉雄
79 独楽の昇華……長谷川龍生
88 劇的なる静けさ……扇田昭彦
104 原風景と記憶……鴻英良
114 ロゴスとタナトス……小苅米晛
121 非在の実在を現実化するドラマ……石沢秀二
125 「街」を射抜く眼……森秀男

PART4——別役実論②

134 あまりに方法的な……菅　孝行
148 電信柱のある即興劇……佐藤　信
153 反制度的なドラマ……衛　紀生
161 身体と風景……森尻純夫
170 別役作品アトリエ公演の試み……小林勝也
175 「別役的空間」の実際……石井強司
180 関係の文体……太田省吾
185 別役作品への私的メモ……程島武夫
189 あの「男」との出会い……利根川光二

PART5——別役実の童話世界
194 現実風刺と存在の淋しさ……中江俊夫
200 「街」売りの少年……奥田継夫
206 記憶の街……岸田理夫
PART6——資料室
212 別役実戯曲主要公演リスト……温水ゆかり・編
221 別役実自筆年譜

写真・渡部雄吉

PART1——別役実と私

別役実との青春——県立長野北高等学校時代

小笠原昌夫

私はいま、ひとりのカトリックの神父を思い出している。田舎町の商家の息子が神学校に進み、何年か後に神父になってふるさとに帰ってきた。そこには幼な友達や級友らが住んでいて彼を迎えたが、聖職者になった彼になかなか馴染めない。机を並べ、悪戯をしあったガキ大将が、ある日突然行いすました宗教者として現われても、人々にしてみれば昔のイメージが今の彼に重なり合ってしまうのだ。

この、悲しむべき事態の原因は明らかである。人々は彼を今日在らしめた厳しい求道の幾年月について全く知らず、彼が刻々変貌し成長する過程を見ることが出来なかったからである。

これに類したことは良くある話だ。別役実と私の関係もこれに近い。少年期にほとんど同じ軌跡を歩んでいたと思える二人が、何時からか全く別の道に入って二十余年過ぎた。いま私が思い浮かべる別役は、相変らず詰め襟ゲタばきの高校生なのである。

県立長野北高等学校（現在は長野高校）は当時から進学校で生徒の質はかなり高かった。共学が建前だが、我々の学年には女子は四人しかおらず、ほとんど男子校と言ってよかった。別役と私は入学後美術部に入り、朝夕、石膏像のデッサンに没頭していた。四〜五年先輩に池田満寿夫がいた筈だが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

当時は知る由もない。その頃別役は絵描きになるつもりだったようだ。

絵は中学時代から描いていた。市立柳町中学校時代良き師に出会い、セザンヌの構図、ボナールの色彩といったふうに目を開かれて夏休みの間絵を描きまくり、休み明けには抱え切れない作品を持ちこんで師を驚かせた。

当時の師、上原正三氏は長野市に健在で、毎年の国画会展に出品しておられる。岸田戯曲賞の『赤い鳥の居る風景』は、前年の師の作品の標題をそのまま借用したものだが、正確に言うと師の絵の題は『赤い鳥（カラス）……』だったのであり、別役が鳥を鳥と読み違えたまま標題に借用したというのが真相である。

高校美術部時代の絵には、ひと目で彼のものと判る個性があった。セピアとか褐色を基調にした重厚な画面。「道と家」を描いたものが多く、線や構図は断定的でどことなく反逆の匂いがした。そういえば絵に限らず当時の彼の周囲にはこの「重厚な反逆」とも言うべき気分がただよっており、時にはそれが野心の炎と見えたり、あるいはニヒルな暗さとも思えたりした。時折りユラリとゆらめく炎と、それを取り巻く暗さ、と言うのが当時の私の別役像だったが、どうもこれも正確ではないようだ。

彼のあのやさしさとはにかみ、明快な論理や長子的配慮といった特長はどうなのだ、とも思う。彼のやさしさについては後に書こうと思うが、彼がふっと見せる暗さ、時には厭世的とも思える表情のかげりを思い出すと私は考えこんでしまう。

我々の絵が変りはじめたのは何時頃からだったろうか。恩師上原先生がある時、二人の絵を見てこうつぶやかれた。「絵以外の要素が多すぎるようだ……」

高校二年の十一月、別役は美術部をやめた。私が部に残ったのは唯只惰性に過ぎず、私と違って別役には、論理を行動の糧に出来る強さが既にあった。この時明確に意識して行われた「転向」こそが、現在の別役実の遙かな出発点ではなかったろうか。次に我々の絵に「絵以外の要素」が忍び込んできた時期について書こう。

高校二年の四月、別役と私は二人だけの同人詩誌を出した。新書判を横にした変り形の、ガリ版刷り三十頁の小さな詩集で、第一号は確か二百部印刷し級友や市内の女子高校の文芸部などに売り込んだ。同人誌の体裁を整えるために、数人分のペンネームを使い分けるなどの苦労はあったが、評判はひかえめに言ってもかなり良かった。一号は全部売り切

れ、巻末に会員募集と書いたために相当数の希望者が入会金を送ってきたので、第二号を出さない訳にいかなくなった。

別役の家の向かいに空き家があり、その二階の物置き部屋を我々は編集室に使った。この部屋と彼の家とを行き来しながら、二人は学校以外のほとんどの時間を過した。当時とて進学のための勉強が不必要な程呑気な時代ではなかった筈だが、そのようなあくせくした記憶はあまり無い。

只ひとつ、今でいう英語塾のようなもの（高校教師をやめ印刷会社をやっている人が何故か無料で教えてくれた）に通って、『シェイクスピア物語』や『ソクラテスの弁明』などを読みあったことがある。

この先生は無類の世話好きで、自分の印刷会社の仕事を文選から校正に至るまでひと通り経験させてくれた上に、アルバイト料まで払ってくれた。

貧乏学生はこれでバイトの味を覚え、次はカッコウ良く家庭教師をやろうと思い立ったのだが、この時別役は大胆不敵にも自分と同学年の女子高生を教え始めたのである。その子の場合は転校による勉強の遅れを取り戻すという特別の理由があったのだが、一体彼はどんな顔で教えていたのだろうか。一方の私は、女友達の妹の中学生を教えたが、姉との契約でバイト料の三分の一を彼女に割り戻すようなことをしていたから、ひとの事は笑えない。

さて、二人だけの同人詩誌は難航の果てに翌年二月ようやく第二号を出した後廃刊となった。この頃既に別役は小説を書いていた。少年の淡い恋心を描写的に書いた短篇の『足袋』が処女作ということになるだろう。続いて、大陸での体験を赤い夕陽と共に回想する『満州記』が書かれ、これが高校時代の最後の創作になる。そして、（月並みな表現ながら）卒業が二人を分けた。

卒業後間もなく私は病いに倒れ、二年間の療養生活をした。暗い挫折の日々を彼の手紙が定期的に見舞ってくれた。展覧会の絵はがきやピカソの画集が届いた。彼のやさしさばかりを感じた時期である。

松川事件結審の夏、久しぶりに別役から六篇の詩稿が届いた。やっているな、と思った。その翌年、私は『象』の初演を観るため上京した。劇団の青年が彼を先生と呼んだ。私は何か仕事がないかとたずね、彼を困惑させた。

彼が結婚した日、懐かしい母上姉上妹君弟君にお会いした。何年ぶりだったろうか。別役のみを知り、この人々を知らぬ者は不幸である。

処女作以前

――早稲田大学〝自由舞台〟時代

鈴木忠志

世間一般では別役の処女作は『AとBと一人の女』ということになっていると思う。しかし、私の知る限りではこの作品以前に二つの戯曲を書いている。ひとつは『貸間あり』という脚色もので、これが実際の処女作である。私にとっても初演出で、大学二年のときだった。劇団の先輩たちから猛烈に反対されたが、強引におしきって上演したのをおぼえている。評判はよくなかった。純粋にオリジナルな処女作ということになれば、これは未上演だが、『ホクロソーセージ』ということになる。

『貸間あり』というのは、ある未亡人が、生活に困ったために下宿人をおこうと広告をだす。そこへ一人の独身男性が部屋を借りにくるのだが、女主人は男が独身であるから部屋を貸さないという。なぜ独身だと部屋を貸さないのか、と男が問いつめると、私が未亡人だからだ、と女主人が答えて、以後えんえんと議論がつづくというものである。

たしか男が、私が独身だからといって部屋を貸さないのは、私の美意識に対する侮辱である、だいたいあなたの年齢と器量を考えてみればいい、というと、女主人が、四十六の婦人が十八の男と結婚したという例を知っています、と平然と答えるところが笑わせた。一種のナンセンスもので、登場人物のセリフがまったく心理的必然性をもたず、スタニスラフスキー・システムで稽古をすることを金科玉条としていた

俳優たちにとっては、手にあまるものだった。

『ホクロソーセージ』という作品は、これよりもさらに奇抜だったために、ついに日の目をみることがなかったものだが、『貸間あり』よりはこの作品の方がオリジナルであるだけに、別役の面目が躍如としていた。

筋はこうである。アパートの一室で肉屋を営業している男の女房が、あるときから突然姿をみせなくなる。男は女房は故郷へ帰ったとかいっているのだが、実際は女房を殺してソーセージにしてしまったという噂がたつ。アパートの住民一同は協議して、ソーセージを全部点検することにする。そこへ全学連がでてきて、それは肉屋の生活権の侵害だといってデモをしたり、一もんちゃくあるのだが、ともかくソーセージをしらべることになる。ところがソーセージをしらべても、女房の肉が入っているかどうかの証拠がない。すると一人の住人が、たしか女房の顔にはホクロがあって、その真中に毛が生えていたという。それをたよりに、ソーセージを輪切りにしてしらべていくと、ついにホクロがでてきて、真中に毛が生えていた、というものである。警官が逮捕にきて、肉屋の主人は観念して連れられていく。その後姿が印象的に卜書に書かれていたと記憶するのだが、ここは間違いかもしれない。

こういう別役が社会主義リアリズムを信奉し、共産党の早稲田大学におけるもっとも主要な細胞のひとつであった劇団にいたのだからおもしろい。下級生であることの特権をフルに活用していたとしても、こんなことでゲラゲラ笑っていた時期はのどかだった。

そのうち別役は私より先に幹部になり、度重なる洗脳の故か、組織の指導者になった責任感の故か、深夜ひそかに私の下宿へ来て、お前もいっしょに共産党へ入ろうよといったのだから、驚くよりほかはない。まさに別役が時折その作品で批判的に描く、集団というもののふしぎな力であろうか。その後、別役は全学連主流派の新島基地反対闘争や松川裁判に関わっていく。最近の別役の作品は、透明でスタティックになっているが、『天才バガボン……』などはこういう別役の資質の一面が気楽にあらわれた作品だろう。

集団といえば、最新作『マザーマザーマザー』はガイアナの集団自殺を素材にしている。これなども別役の学生時代の劇団体験がかなり反映されていると思う。別役の演劇的な動きや作品にふれると、別役ほど集団というものに無縁な作家はいないように思う人もいるだろうが、別役の作品はまったく集団というものに所属した体験の遺産の上に成り立っている一面がある。ただ私には、それがあまりにも遠く古い集団

の記憶であるがために、固定観念になりすぎているような気がしないでもない。

先日唐十郎と話していたら「若い演劇人からよく戯曲がおくられてくるが、ひどいものが多い。もっとも自分の初期の作品も、今の自分におくられてきたら下らないと思うだろうなあ、その点別役は処女作からあの文体を確立していたのだからスゴイよ」といった。別役が本気になって戯曲を書きだしたのは『AとBと一人の女』からだから、唐のいう通りである。遊びごころで二作の習作をものにしたあと、その気になったらアッという間に『AとBと一人の女』のような秀作を書きあげ、以後の二十年間、一貫してレベルをおとさない別役は見事である。

一介の学生、一介の精神——新島闘争の頃

月村敏行

別役実とは、新島で初めて会った。一九六一年三月下旬である。わたしが幾人かの友人と共に京都くんだりから新島に現われたとき、別役はすでに新島に、早大自由舞台の一員として居たのである。わたしたちを、ちっぽけな桟橋にまで迎えた一員のなかに居たように思う。何故、新島か、と言えば、当時、いわゆる新島ナイキ反対闘争があり、全国の学生が新島に集まってくるということがあったからである。

しかし、反安保闘争が空中分解した後のことだ。全国から学生が集まってくると言っても、それ程盛りあがった気分が学生の間に充ちていたわけではない。ただひとたび新島に行ったものは、島ぐるみ、島民ぐるみの反対闘争に巻きこまれ、反安保闘争のときとは格段にちがった経験に高揚するという点があった。何しろ、新島では、入りくんで、崖の切り立った湾口が、ミサイル「ナイキ」の発射、爆発練習場に決められてしまったのである。この湾口から海に向って、「ナイキ」を発射、爆発させるわけで、まず島民には、その射爆練習が太平洋を回遊してくる魚群をよりつかせなくするだろう、という強い危惧があった。また、新島では多くの家で豚を飼育していたので、発射の爆破音は豚の成育に影響する、と考えられたのである。それに、都会から遠く離れた島の生活に、自衛隊の機械化部隊の尖鋭がのしてくることへの心的な反発感も大いにあった。そして、この、新島に「ナイキ」のため

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com